公益財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

Hem21 NEWS

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

令和元年(2019) 11月 Vol. 78

CONTENTS

❶〜❷ 第20回アジア太平洋フォーラム・淡路会議を開催
❸ 研究員レポート
❹ 情報ひろば
❺ HAT神戸掲示板
❻〜❽ 人と防災未来センターMiRAi

第20回アジア太平洋フォーラム・淡路会議を開催

第20回となるアジア太平洋フォーラム・淡路会議が、8月2日(金)〜8月3日(土)の両日にわたり淡路夢舞台国際会議場(淡路市)で開催されました。テーマは「21世紀のアジア太平洋社会の展望」。

1日目の国際シンポジウムでは、400名の参加のもと、3名の識者による記念講演が行われました。また、アジア太平洋地域に関する優れた人文・社会科学領域の博士論文を顕彰する第18回アジア太平洋研究賞(井植記念賞)の授賞式も併せて実施されました。

記念講演では最初に「人生100年 共に生きる」と題して、安藤忠雄氏(建築家)が講演を行いました。

兵庫県立美術館には、安藤氏が青春のシンボルとして作成した高さ約3mの『青いりんご』のオブジェが展示されています。安藤氏によると、多くの人は、学生時代までは希望に溢れ、新しい世界を見つめている『青いりんご』です。人は100歳まで『青いりんご』でいなければなりません。ただ100歳まで生きるのではなく、自分が家族、社会に何ができるかを考えることが大事であり、『青いりんご』には、こうした思いが込められているのです。

また、ご自身は大学教育や建築の専門教育を受けておられません。だからこそ18歳の時に一生勉強していくと決め、今でも毎日、本を読みながら次のことを考えているそうです。日本の若者は大学を卒業してしまうと、本を読まなくなりますが、安藤氏は好奇心を持って多くの本を読んで学び続けていくことの重要性を強調されました。

さらに、淡路夢舞台をはじめ、これまでに手がけてきた多くの建築や、乱開発ではげ山と化した瀬戸内海の島々での植林、大阪の中心を流れる大川沿いに桜を植える「桜の会・平成の通り抜け」プロジェクトなど、ライフワークとして取り組んできた様々な緑化プロジェクトについても紹介されました。

続いて、「「文化力」と地域の発展」と題して、青木保氏(政策研究大学院大学政策研究院シニア・フェロー)が記念講演を行いました。アジアでは21世紀に入り、各国が文化に対して力を入れ始めており、特に文化施設が各地で完成しています。20世紀のシンガポールはどちらかというと文化に対して冷淡でしたが、2000年以降は劇場やアジア最大の国立美術館などが造られるようになりました。また、北京や上海のほか、タイ、インドネシア、台湾などにも大きな文化施設ができ、いいものを造れば世界中から人が集まり、国際的評価につながることに政府が気付いたのです。

また、そこで重要になるのが文化交流の実践です。訪日外国人数は今や4,000万人を視野に入れています。日本のことを知って、好きになってもらうためにも、大観光化時代には的確に対処しなければなりません。青木氏は、異文化理解の段階から、実践的な文化交流を重ねるためにも、神戸に「アジア・太平洋国際文化学術生活センター」を作ってはどうかと提案されています。神戸で残念に思うのは、文化的に先端を走っていたはずですが、文化力を示すものがないことだと言います。だからこそ、学術研究だけでなく、センター内にショッピングモールを作り、観光客が立ち寄れるような場所となる施設を作ってほしいと述べられました。

さらに、世界的に人を呼び込む取り組みとして、アラブ首長国連邦がアブダビにルーブル美術館を誘致した事例やスペインのビルバオがニューヨークからグッゲンハイム美術館を誘致した事例等を紹介されました。

最後に、「21世紀のアジア・太平洋経済」と題して、ナロンチャイ・

アクラサニー氏（経済学博士／元タイ王国エネルギー・商務大臣）が講演を行いました。

まず、2016年のアメリカ大統領選で不均衡を政治問題にうまく利用してトランプ大統領が誕生して以来、米中の貿易摩擦が大きくなっています。1980年代にはアメリカと日本に通商問題がありましたが、今はその対象が中国になっています。加えて、5G、自動運転などに代表される破壊的テクノロジーが台頭しており、それにより米中のライバル関係はさらに激しくなっていると指摘されました。

その上で、最近、アジア太平洋の新しい局面について研究しており、太平洋西部と太平洋東部が分断されていくのではないかと考えているそうです。APECによって統合されたグローバル・バリュー・チェーンは、米中の問題もあって、今、壊れかけています。同時に、太平洋西部の諸国は、日本や韓国、中国がリーダーとなって、テクノロジーを迅速に拡充してきました。このため、太平洋西部にはテクノロジーの選択肢があり、太平洋東部と協力しなくても、テクノロジーを使うことができるのです。ナロンチャイ氏は、今は貿易とテクノロジーの新しいパラダイムにあり、この東部と西部との競争関係によって、これまであったグローバル・バリュー・チェーンが壊れてしまうのではないかと言います。太平洋西部は、政治経済の力や技術発展の力によって、より統合されていくのではないかと今後の展望を語られました。

2日目は、淡路会議メンバー等65名の参加のもとフォーラムを開催し、3名の講師から基調提案をいただきました。

杉本真樹氏（外科医/Holoeyes株式会社COO/帝京大学特任教授）は、「社会が医療を担うための技術革新」と題して基調提案を行いました。現在、Society4.0（コンピュータの出現による情報化社会）からさらなるデジタル革新、イノベーションを通じてSociety5.0へ移行しつつあります。こうした中、あらゆる個人医療情報はデジタル化され、健康診断から医療行為に至るまで広く共有されています。特にレントゲンを始めとする画像情報は、VR仮想現実/AR拡張現実/MR複合現実などの技術を活用し、立体的、空間的に表現され、医師の診断治療技術の向上やシミュレーション、トレーニングなどに活用されています。また、仮想空間を利用した遠隔医療や、地域医療支援でも、ユーザーの実体験を直感的に共有することで、新たなコミュニケーションを生み出しています。Society5.0ではバーチャルとリアルを融合して、人を中心とした技術に基づく新しい社会を作っていくことになります。杉本氏は我々もそのメンバーの一人だと言います。医療を担うのは医者だけではなく、病気を治すのは病院だけではありません。社会が医療を担うためには、皆さんも情報を自分から提供したり、共有したりすることが必要です。もちろん個人情報がない状態で共有し、そして、何よりも意識を高め、技術に触れていくことが重要だと考えていますと述べられました。

竹中ナミ氏（社会福祉法人プロップ・ステーション理事長）は、「全ての人が誇りを持って生きられるユニバーサル社会の実現に向けて」と題して基調提案を行いました。プロップ・ステーションでは、障がいのある人たちの可能性に着目して「チャレンジド」という言葉を使っています。竹中氏は「チャレンジドをタックスペイヤーにできる日本」をキャッチフレーズに掲げ、30年前からコンピュータを使って一人一人に眠っている働く意欲と働く力を世の中に発揮してもらうための活動をずっと行っています。その背景として、医者から「一生ベイビーのままですよ」と言われるほどの大変重い脳の障がいを持ち、現在46歳になる自身の娘（マキさん）の誕生があります。娘のおかげでたくさんの人たちと出会うことができたのです。私はよく「マキちゃんは障がいが重いからコンピュータなどさわれないのに、なぜコンピュータができる人のことをそんなに応援しているの？」と言われるそうです。それに対して竹中氏は、母として、娘を残して安心して死にたいという究極のわがままがあるからだと言います。そのためには、社会がそういう方々に温かい目を持って、娘のような本当に経済的な能力を持つこともできない人を支えられる国家の経済状況も必要になります。そのため、「チャレンジドをタックスペイヤーにできる日本」というテーマを掲げ、みんなで弱い人も限りなく支えていける国でありたいと思っていると述べられました。

最後に、有本哲也氏（株式会社デジアラホールディングス代表取締役会長）は、「メガコンペティション時代を生き抜く地域中小企業の取り組み」と題して基調提案を行いました。神戸市の兵庫区で製材所を営む家系に生まれ、祖父から父へと時代の変化とともに家業も製材所からアルミサッシなどの建材販売へ事業承継を行ってきました。ご自身の代になり、2000年に現在の会社を設立しました。インターネットを介して全国にウッドデッキやカーポートなどのエクステリア建材を施工とともに販売する新たなビジネスモデルである「エクスショップ」や「お庭・外構・イエソト」の提案から工事まで行う「ガーデンプラス」の全国展開を行っています。現在では、本社を六甲アイランドの神戸ファッションマート内に置き、従業員200名弱、売り上げは直近で106億円にまで成長したとこれまでの足跡を振り返られました。

また、家業から企業への変化の中、多くの葛藤がありましたが、新卒採用、人材育成により、若い人材が成長し、チャレンジできる環境整備を心がけています。さらに厳しくなるメガコンペティション時代においても、当社の一番の強みである全国500社を超える施工事業者とのネットワークを通じて、更なる市場拡大を図っていきますと今後の抱負を述べられました。

基調提案の後、参加者は、「安全・安心社会の課題と展望」、「共生社会の課題と展望」、「グローバル社会の課題と展望」の3つの分科会に分かれ、それぞれのテーマで活発な討論が展開されました。

午後からの全体会では、冒頭に分科会での討論の概要について各分科会座長から報告をいただいた後、参加者全員でさらに議論を深め、最後に五百旗頭真氏（ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長）が総括と謝辞が述べて閉会しました。

東日本大震災復興の総合的検証
―次なる大災害に備える

研究戦略センター主任研究員
石塚 裕子

プロジェクトの概要

本プロジェクトは、東日本大震災の復旧・復興プロセスについて、国、県、被災自治体における取り組みを、被災の程度やタイプ、市町村の成り立ちなどから類型化して概観し、分野別復興施策、制度を分析することで総合的に検証することを目的とし2016（平成28）年から取り組んでいる。初年度（平成28年度）は、復興庁より「東日本大震災の復興状況に関する調査」の受託を受け「集中復興期間」における復興への取り組みの実態を把握した。また、3年間で岩手、宮城、福島、東北3県の知事をはじめ岩手県3市（宮古市、釜石市、陸前高田市）、宮城県5市町（南三陸町、石巻市、東松島市、名取市、岩沼市）、福島県5市町（新地町、南相馬市、双葉町、富岡町、楢葉町）の首長へのオーラルヒストリー調査を実施した。

本プロジェクトでは、上記調査に加え、文献調査、現地調査を実施し、今後の被災地の復興上の課題とその解決方策を明らかにし、将来のあるべき社会像を見据えた「創造的復興」の実現に向けた知見の創出と政策提言を行う。

調査概要

上記に記したオーラルヒストリー調査に加え、政治学、工学、福祉社会学、教育学など各専門分野の委員がテーマ別に復興政策の検証を行った。

東日本大震災の地震と津波メカニズムと被害の特徴を示した上で、被害の規模、位置などにより被災類型と復興のプロセスや市町村合併の影響などによって復興の形を分析した。テーマ別として避難、住まい・まちの再建、生業の再生と雇用、学校教育・子育て環境については多面的に分析を行った。また原子力災害からの再生・復興について、放射能問題、福島の再生と復興施策、長期広域避難について現時点での取り組み、課題についてまとめた。さらに復興を支える制度・仕組みとして人、モノ、カネの「復興のトリレンマ」について調査分析を行っている。そして東日本大震災の教訓をいかに後世に伝えるべきか、復興施策を体系化し提言を試みる。

政策提言に向けて

今後、我が国は人口減少、老いる社会を迎える中で、すでに多発している大規模な豪雨災害をはじめ、南海トラフなど未曽有の大災害に備えて、どのような復興思想を持ち復興体制を再構築すべきなのか。本調査から東日本大震災については以下のような課題が明らかになっている。

⑴復興思想の再考

東日本大震災では、被害が広域で甚大であったため国力の維持という課題が生じた。その一方で、実質全額国費負担となり、費用制限を設けず復興事業を進めた。今回は復興特別税という現役世代負担の思想で予算が確保された。しかし、その後も想定外の災害が多発する中で、想定外の課題克服に向けて取り組むためには、復興思想を再考すべきである。また、原発災害を福島の課題に留めず、フクシマの復興から思想の再構築が求められている。

⑵大規模災害における被災類型と復興の形

東日本大震災では、被災の規模、位置などにより「市街地壊滅型」、「市街地部分被災型」、「沿岸集落被災型」、「旧町被災型」、「内陸地震被災型」、「原発被災型」の6類型に分類された。被災の6類型にまちづくりプロセスの類型（トップダウン型・協議型・無関与型）や市町村合併の影響、災害前のまちづくりへの姿勢などにより多種多様であり、必ずしもパターン化できるものではなかった。多様な被災、復興の形がある中で、事前復興とは、いかにあるべきか多様な視点から検討が必要である。

⑶国・県・市町村の相互関係・役割分担の再確認と体制強化

東日本大震災では、役場自体が被災するという自治体機能が大幅に低下する事態を招いた。その中で、国、県、全国自治体による支援が力を発揮し、対口支援方式の有効性が確認され、さらなる制度の充実が求められる。

また、復興過程では、国あるいは復興庁と市町村が直接交渉する機会が増え、義援金も自治体ごとに運用された。地域被災状況に応じて施策を実施できる一方で、被災地間格差を生む要因ともなった。このため、復興過程における国、県、市町村の役割分担の再確認、再設定が必要である。

⑷分野別復興施策・制度のあり方

①広域避難

災害の大規模化にともない、広域避難は長期化し帰還しない傾向にある。大災害が頻発する中で、広域避難の支援は全国相互補完の関係にあり、恒常的に支援機能をもつことが求められる。

②住まいの再建

津波被災地では、現地再建が難しい中で、コミュニティの再生と個人の再建に矛盾を抱えたまま開発志向の既存施策で対応したため、事業が長期化し、被災者の人生に大きな影響を与える結果となり課題が多く残った。

③産業・雇用の再生・創生

支援の充実により、既存産業の設備の早期復旧、産物のブランド化など新たな地域産業の創生もみられた。また、再生可能エネルギーや観光など、復興を支える産業の多様化も特徴であった。しかし、担い手不足という根本的な課題と原発事故による放射性物質の風評被害という課題が残る。

再建された事業の継続性、復興需要終了後の職種転換、職業訓練（再教育）制度、人口減少への対応、生業や技能の世代間継承などへの対応など、復興過程のニーズに応じた制度の運用が求められる。

④被災者支援制度

被災者生活再建支援法などの「全国制度」と、災害ごとに事後的に決定される義援金や復興基金といった「準制度」をあわせた総体として被災者支援の枠組みを事前に構築し、準制度を全国制度の単なる補完としてではなく活用できる仕組みの構築が望まれる。

⑤記憶と伝承

東日本大震災以降、災害の記憶は電子化（デジタルアーカイブ）と空間化（祈念公園）される中で、伝承への取り組みは多様で自発的で自立的であるべきだが、それぞれの理念や意義をもった連携、ネットワークが必要である。

本研究会では以上の課題を体系化し総合的に検証結果をまとめ、政策提言を行う予定である。

情報ひろば

Information

こころのケアセンター

令和元年度第2期「こころのケア」研修の受講生募集

「こころのケア」に携わる保健・医療・福祉・教育等の分野で活動されている方を対象に、各種課題への対処法等について学ぶ「こころのケア」研修を実施しています。

来年1月から2月にかけて実施する研修の受講生を次のとおり募集しています。ぜひご参加ください。

●**研修概要**

区分	コース名	期間	定員	対象	受講料（資料代等）
専門研修	①消防職員のための惨事ストレスの理解と予防	1月15日（水）16日（木）（2日間）	35名	消防職員	3,600円
	②発達障害とトラウマ	1月30日（木）	35名	こども家庭センター（児童相談所）職員、福祉事務所職員等児童虐待関係職員、保健所職員、教職員、スクールカウンセラー、保育職員等	2,500円
	③子ども達のいじめのケア －加害と被害の連鎖－	2月13日（木）	35名	教職員、スクールカウンセラー、教育委員会職員、こども家庭センター（児童相談所）職員、いじめ相談窓口の相談員、保育職員、児童福祉施設職員、司法関係職員	2,500円
	④対人支援職のためのセルフケア	2月20日（木）21日（金）（2日間）	35名	保健・医療・福祉関係の対人支援業務従事者（保健師、ケースワーカー、各種相談員、福祉施設指導員等）、教職員、スクールカウンセラー、保育職員等	3,600円

●**場所**＝兵庫県こころのケアセンター（阪神「春日野道」駅から南へ徒歩約8分）

●**申し込み方法**＝受講申込書（※）に必要事項を記入の上、郵送、FAX、Eメールのいずれかで下記までお送りください。各研修開始日の1か月前（前月の同じ日）の17時を期限として、申し込み多数の場合は、初めて受講の方を優先の上、抽選で決定します。

※当センターホームページからダウンロードできます

●**申し込み・問い合わせ**

兵庫県こころのケアセンター 研修情報課
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目3-2
TEL 078-200-3010　FAX 078-200-3017
Eメール：kensyu@j-hits.org
http://www.j-hits.org/

コミュニティ型ワーキングスペース
「ON PAPER」はじめました!

ON PAPER

https://onpaper.jp

ONPAPER 検索

兵庫県立美術館

特別展「ゴッホ展」

鮮やかな色彩と勢いのある筆づかいで今も世界中から愛されているフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)。37年の生涯のうち画家として活動したのはたった10年に過ぎず、代表作のほとんどは晩年のわずか数年間で描かれたものでした。

27歳の頃に画家を志した当初は、オランダで「ハーグ派」と交流しながら、暗い色彩で農村風景や静物などを描いていたファン・ゴッホ。目にした風景や事物をデッサンし、それを元に抒情的な光景を描いたハーグ派との邂逅(かいこう)によって、画家としての基礎を身につけました。その後、弟テオの勧めで移り住んだパリで「印象派」と出会い、鮮やかな色づかいが生む効果に驚き、独自の作風を確立していきます。

フィンセント・ファン・ゴッホ《糸杉》 1889年6月 油彩、カンヴァス 93.4×74cm メトロポリタン美術館 Image copyright ©The Metropolitan Museum of Art. Image source: Art Resource, NY

世界各国からファン・ゴッホの作品約40点が集結する同展では、《糸杉》など晩年の代表作に加え、貴重な初期作品も来日。さらに、「ハーグ派」のマウフェやラッパルト、「印象派」のモネ、ルノワール、ピサロなど、彼に大きな影響を与えた画家による作品も展示。画家としての原点を示す初期の画業から始まり、ポスト印象派を代表する画家になるまでの劇的な成長過程を辿ります。

フィンセント・ファン・ゴッホ《ジャガイモを食べる人々》 1885年4-5月 リトグラフ(インク・紙)26.4×32.1cm ハーグ美術館 ©Kunstmuseum Den Haag

ゴッホは、いかにしてゴッホになったのか。ハーグ派と印象派…“ふたつの出会い”によって導かれたファン・ゴッホの、短くも濃密な画業を堪能できます。

■会期=2020年1月25日(土)～3月29日(日)
■観覧料=一般1,700円、大学生1,300円、70歳以上850円、高校生以下無料

注目作家紹介プログラム チャンネル10
入江早耶展 純真遺跡(ロマンスいせき) ～愛のラビリンス～

兵庫県立美術館では2010年より毎年「注目作家紹介プログラム〈チャンネル〉」を開催してきました。10回目となる2019年度の「チャンネル」では、岡山県出身で広島を拠点として活動する入江早耶(1983～)をご紹介します。入江はこれまで、長靴、鉛筆や化粧品などの日常的な素材を用いて作品を制作するなかで、一貫して、変わらないものの存在を問い続けてきました。消しゴムを用いたシリーズでは、掛軸や写真などのイメージを消し、消し去った観音や小鳥などを小さな立体物として消しカスで制作しています。

入江早耶《純真遺跡 ～愛のラビリンス～》作品スケッチ

同展では、兵庫の「菟原処女(うないおとめ)の伝説」をテーマとして、新作を発表します。二人の男性に求婚された娘はいずれか一人を選ぶことができず、自ら命を絶ち、彼らも娘の後を追いました。悲しい伝説は、作家のユニークな手法によって、新しい視点で現代に生まれ変わります。

入江早耶《形象八景》2017年 本、消しゴムのカス

■会場=ギャラリー棟アトリエ1 ほか
■会期=11月23日(土・祝)～12月22日(日)
■観覧料=無料

◎休館日=月曜(ただし2月24日は開館、翌火曜日休館)、年末年始、メンテナンス休館
◎開館時間=10時～18時(金曜・土曜は20時まで)
※入場は閉館の30分前まで
TEL 078-262-0901(代)　https://www.artm.pref.hyogo.jp/

JICA関西

◆食べることから始める国際協力! JICA関西食堂の月替わりエスニック料理

JICA関西1階の食堂(カフェテリア方式)は、どなたでもご利用できます。完全禁煙で、安心して料理を楽しめ、子供椅子もご用意していますので、お子様連れも歓迎です。毎月の月替わりエスニック料理もご好評いただいております!ぜひ、お気軽にお立寄りください。

写真は11月のケニア料理

JICA関西食堂
▶https://www.jica.go.jp/kansai/office/restaurant/index.html
■営業時間=(昼)11時30分から14時まで
(夜)17時30分から21時まで
※各終了30分前ラストオーダー
■定休日=年中無休(年末年始を除く)

月替わりエスニック料理の詳細と写真はこちら→

◎問い合わせ
JICA関西(独立行政法人国際協力機構関西センター)総務課
TEL 078-261-0346　FAX 078-261-0342
Eメール jicaksic-event@jica.go.jp
その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック!
▶http://www.jica.go.jp/kansai/

日本赤十字社 兵庫県支部

12月1日から「NHK海外たすけあい募金」が始まります!

日本赤十字社は、12月1日～25日まで「NHK海外たすけあい募金」を実施します。紛争や自然災害、飢餓、病気などで命の危機に直面している人々を救うため、日赤が毎年NHKと共同で実施しているキャンペーンです。

赤十字×NHK

兵庫県内主要駅で街頭募金を実施いたしますので、皆さまの温かいご協力をお願いいたします。

12月 8日(日)JR三ノ宮駅	いずれも13時から15時まで
15日(日)JR神戸駅	
22日(日)JR姫路駅	

いのちと健康を守る赤十字活動は、皆さまからお寄せいただく活動資金で成り立っています。活動資金にご協力お願いします。

■郵便局・ゆうちょ銀行からご協力いただけます
口座記号番号 01110−0−1136
口座加入者名 日本赤十字社兵庫県支部
※窓口で取り扱いの場合、振込手数料は無料です

◎問い合わせ
TEL 078-241-8921
赤十字　兵庫　検索

日本赤十字社 兵庫県支部 Japanese Red Cross Society

国際防災・人道支援協議会（DRA）活動報告シンポジウム

阪神・淡路大震災25年にあたり、復興のシンボル・プロジェクトのひとつとして整備された神戸東部新都心（HAT神戸）の意義やそこを中心に集積する「国際防災・人道支援協議会（DRA）」を構成する団体の活動等を地域住民など広く県民に紹介することで、DRAとしての総合的な発信力を高めるとともに、各機関の連携をより一層強化し、活動の更なる活性化を図るため、「国際防災・人道支援協議会（DRA）活動報告シンポジウム」が８月27日に神戸市内で開催されました。

基調講演では、DRA会長の五百旗頭真 ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長が、「大災害時代の日本列島～人間の安全保障に向けて～」と題して阪神・淡路大震災からの創造的復興の歩みを振り返り、人間の安全保障を大切にする志の重要性を訴えました。

引き続きDRA会長代行の河田惠昭人と防災未来センター長をコーディネーターに会員団体の活動発表がありました。

国際連合人道問題調整事務所（OCHA）の吉田明子神戸事務所長は、日本政府や国内外の人道支援団体との連携強化を進めていることを説明した上で、日本人に深く広く根ざしている思いやりの心で人道支援活動への理解を求めました。

国際協力機構関西国際センター（JICA関西）の西野恭子所長・国際防災研修センター長は防災事業での国際的な研修事業を紹介し、国連のSDGs（持続可能な開発目標）について「全ての目標に防災が関連している」として目標達成に意欲を見せました。

アジア太平洋地球変動研究ネットワーク（APN）センターの塚田源一郎センター長は、地球温暖化時代の国際環境協力に向けた取り組みを説明しました。

世界保健機関（WHO）健康開発総合研究センターの茅野龍馬医官は、災害健康危機管理の重要性が高まっており、より良い防災について健康面から努力していくと語りました。

総括で河田会長代行は、「それぞれが目標を持ちながら、ネットワークを活かして共通の目標に向かって進むDRAの活動に支援を」と呼びかけました。

シンポジウムの概要

[開催日時] 令和元（2019）年8月27日（火）15:00～17:00

[開催場所] JICA 関西2階 ブリーフィングルーム

[参 加 者] 110人

【基調講演】

テーマ：「大災害時代の日本列島 ～人間の安全保障に向けて～」

講　師：五百旗頭 真　DRA会長（ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長）

【団体発表】

コーディネーター・総括：河田 惠昭　DRA会長代行（人と防災未来センター長）

①テーマ：国際緊急人道支援と日本

発表者：吉田 明子　OCHA神戸事務所長

②テーマ：防災分野におけるJICAの国際協力

発表者：西野 恭子　JICA関西所長・国際防災研修センター長

③テーマ：地球温暖化時代の国際環境協力

発表者：塚田 源一郎　APNセンター長

④テーマ：災害・健康危機管理（Health-EDRM）に関する世界の動きと ひょうご・神戸・日本の貢献

発表者：茅野 龍馬　WHO健康開発総合研究センター医官

「HAT減災サマー・フェス」を開催しました

人と防災未来センターでは、地域防災意識の向上と地元HAT神戸住民の方々の交流の場として、8月24日（土）に「HAT減災サマー・フェス」を開催しました。

平成28（2016）年度の初回から4回目となる今回は、あいにく小雨まじりの天候でしたが、約1, 300人にご来場いただきました。

14時から屋外ひろばを中心に行われた「減災縁日」では、昨年度も人気の高かった「ロープワークで流れるプールでボール釣り！」や「かわいいキャンディレイをつくろう！」などのほか、「六甲山の災害展　保水力実験」「体幹バランス競争！」など今回初お目見えの体験ブースに、小さな子どもさんから大人まで多くの方にご参加いただきました。

18時からは、東館南側に「夕涼みカフェ」を設け、減災縁日プログラムの参加ポイントと交換できる「サマーフェスプレート」などを食べながら、地域の方々で和やかに交流できる時間を過ごしていただきました。

その後「ALL　HATひとぼうステージ」が河田センター長のあいさつによりスタート。

「夏休み防災未来学校」のワークショップで子供達が製作した「減災だんじり」の初披露のほか、渚中学校放送部が制作した防災映像作品「未来へつなぐ」の初上映や、タバティー・タバタ氏によるライブなどが行われ、大盛況のうちに幕を閉じる一日となりました。

ロープワークで
流れるプールでボール釣り

六甲山の災害展 保水力実験

体幹バランス競争

ひとぼうステージ
河田センター長あいさつ

ひとぼうステージ 減災だんじり

ひとぼうステージ
渚中学校放送部映像作品の
お披露目上映

ひとぼうステージ タバティ・タバタ「サマーフェスライブ」

（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
観覧案内・予約／TEL 078-262-5050　http://www.dri.ne.jp/

開館時間
9時30分～17時30分（入館は16時30分まで）
※7月～9月は9時30分～18時（入館は17時まで）
※金曜、土曜は9時30分～19時（入館は18時まで）

入館料金

大　人	大学生	高校生／小・中学生
600円（450円）	450円（350円）	無料

［障がい者］

大　人	大学生	高校生／小・中学生
150円（100円）	100円（50円）	無料

［70歳以上の高齢者］　300円（200円）

※（　）は20人以上の団体料金
※毎月17日（休館日の場合は翌18日）は入館無料

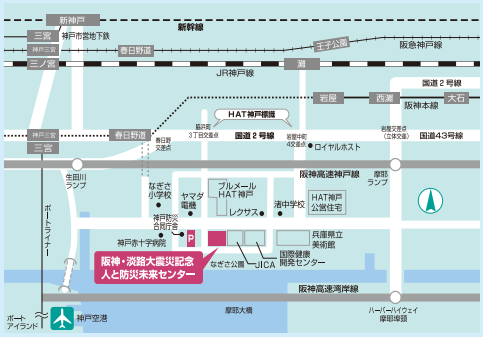
休館日
毎週月曜（月曜が祝日の場合は翌平日）、12月31日と1月1日
※ゴールデンウイーク期間中（4月29日から5月5日まで）は無休
※資料室の開室日についてはホームページでご確認ください

交　通

鉄道
- 阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
- JR「灘」駅南口から徒歩12分
- 阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分

バス
- 三宮駅前から約15分

車
- 阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
- 阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
- 阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分



●有料駐車場あり　●バス待機所（予約制／無料）あり

新任研究調査員等紹介

研究調査員　藤原 宏之（ふじわら ひろゆき）

このたび三重県伊勢市から派遣されました藤原 宏之と申します。

私は、人と防災未来センターが整備された平成14年から防災、水防業務に携わっており、地域防災計画や津波避難計画などの各種計画整備や、職員向け訓練などの業務に従事してきました。主な災害対応経験は伊勢市において、平成29年台風第21号により約1,800棟の家屋被害が発生し、災害救助法が適用される災害対応を行いました。また、熊本地震、大阪府北部を震源とする地震では、伊勢市から被災自治体に対して資料作成等の遠隔支援を行い、平成30年７月豪雨では対口支援の三重県隊第一陣として、現地での支援を行っています。

多くの出会いと、知識、知恵が集まる人と防災未来センターは、施設の視察や研修の受講生、また、近年は研修の講師として、いつも楽しみに訪れていた施設です。ここで研究調査員として業務に従事できる貴重な機会をいただけたことを光栄に思います。

本センターへの派遣中は、「被災自治体が的確な時期に必要な支援を受けるためには」をテーマに研究を行いたいと考えています。また、研究調査員として様々な活動に挑戦したいと思いますので、ご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

震災資料専門員　三木 沙友理（みき さゆり）

10月から震災資料専門員に着任しました、三木　沙友理です。私は1989年に神戸市須磨区で生まれ、その後、滋賀県の大学に入学するまでの間、神戸の街で育ちました。専攻は美術史で、地元・神戸ともゆかりのある南蛮屏風について研究をしています。

私の思い出の傍らには、阪神・淡路大震災があります。まず5歳の時、私自身が阪神・淡路大震災を経験しました。震災によって、今まで当たり前であった電気や水が、とても貴重な物なのだと知りました。遊び場だった公園には仮設住宅が建ち並び、町の景色の一つとなっていきました。震災から25年が経とうとしている今、その公園にもう仮設住宅はありません。記憶の中の風景も薄れ、具体的に何世帯の方々がそこで暮らしていたのか、私自身、思い出すことはできません。

私が専攻している美術史には、過去に生きた人々が残したモノや記述を探し、調べ、考察するという研究方法があります。過去につくられたモノや記述は、何十年、何百年と時代を渡る内に、いくつかの情報が剥がれ落ちていきます。長い年月の中で忘れ去られ、現代に伝わることのなかった情報もあるでしょう。阪神・淡路大震災に関する記憶やモノが、年月の中で薄れていくのは当然のことなのかもしれません。けれど、そうならないように手を尽くすことはできます。一つでも多くの情報をこれからの世代に残し、活用してもらえるよう、震災資料専門員として精一杯努めさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

Hem21NEWS
vol.78
令和元年11月発行

（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2（人と防災未来センター）
http://www.hemri21.jp/

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部
TEL 078-262-5580
FAX 078-262-5587

●人と防災未来センター
TEL 078-262-5050
FAX 078-262-5055

●こころのケアセンター
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010
FAX 078-200-3017

●研究戦略センター
▶研究調査部
TEL 078-262-5570
FAX 078-262-5593
▶学術交流部
TEL 078-262-5713
FAX 078-262-5122

ニュースレターに関するご意見・ご感想を機構までお寄せください